原撰本『和歌一字抄』下巻

日比野　浩　信

藤原清輔の和歌一字抄は原撰本・中間本・増補本の三系統に分類されているが、原撰本系統は上巻のみが知られ、下巻の原撰本系統本は確認されていなかった。

そのような中、伝後光厳院筆本（大阪青山短期大学所蔵）は南北朝期の書写にかかり、上下巻を完備する。ほとんどが江戸期の書写本（一部室町末期の書写本も存する）である和歌一字抄においては、群を抜く古さからも注目すべき伝本である。その本文はといえば、上巻は他の既知の原撰本との比較によって、また、下巻についても、西行・定家の歌など明らかな後世の増補歌を含まず、中間本と比べて歌数が少ないことから、原撰本系統であると認め得ることが報告[1]されている。つまり、伝後光厳院筆本は、飛び抜けて書写年代が古い原撰本系統の伝本であるのみならず、下巻の唯一の原撰本系統としても極めて貴重な存在なのである。ただ、惜しむらくは、その本文の披見が容易ではないことである。ちなみに、和歌一字抄は、『校本和歌一字 付索引・資料』[2]には、所在の確認できた現存伝本のほとんどが対象とされ、校本に反映されているが、この伝後光厳院筆本については、「未精査本」として処理され、校異には含まれていない。その本文の公開が切望される所以である。

ところで、近年架蔵に帰した一本は、下巻のみの零本ながら、報告されている伝後光厳院筆本の特徴に一致しており、

やはり原撰本系統に位置付けられるべき本文を有しているようである。そこで、まずはその本文の公開を急務と考え、ここに翻刻する次第である。

該本は、縦二十四・二センチ・横十七・一センチの写本一冊。書写年代は江戸時代前期頃であろう。二折（第一折九紙・第二折十一紙）からなる綴葉装。表紙欠。裏表紙は、現状では共紙表紙があるが、元来は表紙が施されていたと思しい痕跡が認められる。第一紙の汚損状態から、かなり早い時期に現状のようになったと推測される。墨付三十七丁・遊紙三丁。第一紙が墨付第一丁に当たる。一面十三行書、和歌一首一行書。奥書などは無いが、内題に「和歌一字抄■〈哥三百六十首／付証哥百十首〉」、尾題に「和歌一字抄■〈已上九百三十首〉」とある。これは伝後光厳院筆本や、中間本に分類されている三康図書館本にも同様の記述がある。ただ、■の部分には「擇」のような文字が入り、伝後光厳院筆本や三康図書館本では、ここは「下」となっている。歌数は四百六十六首で、うち三首は行間挿入、また、新編国歌番号で六四七番に当たる一首は、歌題と作者名はあるものの歌が欠落している。(3)

前述のように原撰本系統に分類すべき伝本であると考えられるが、ここでは書誌的事項を略述するにとどめ、詳細は別稿に譲ることとする。

注

（1）伊井春樹氏「伝後光厳院筆『和歌一字抄』の本文」（島津忠夫先生古希記念論集刊行会編『日本文学史論　島津忠夫先生古希記念論集』（平成九年九月　世界思想社）

（2）和歌一字抄研究会編著『校本和歌一字 付索引・資料』（平成十六年二月　風間書房）

（3）本翻刻では『校本和歌一字抄』の方針に倣い、欠落歌、補入歌にも歌番号を与えた。

（本学非常勤講師）

凡例

翻刻に当たっては、次のような方針で行った。

一、漢字・仮名の別、仮名遣いは、底本のままとした。

一、通行の字形に改めたが、一部そのままとしたものもある。

一、虫損箇所については、残った字形などから極力推測し、他本を参照した上で（　）に入れて補うようにした。

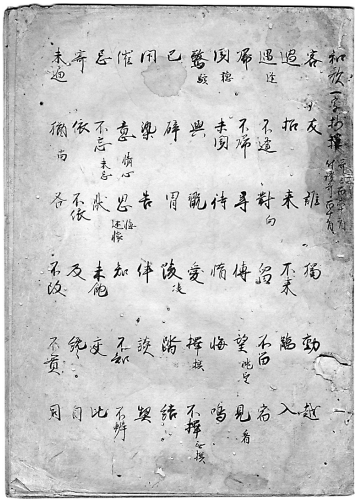
一、解読困難な文字は■とした。

一、改行などは底本の通りとした。

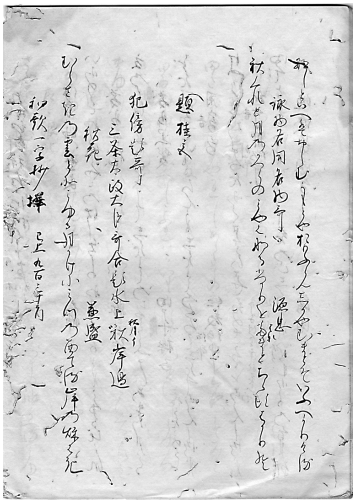
一、底本の改丁箇所には」を付し、丁数、表裏を一オ、一ウのように示した。

一、本文に不審がある場合は右傍に（ママ）と付した。

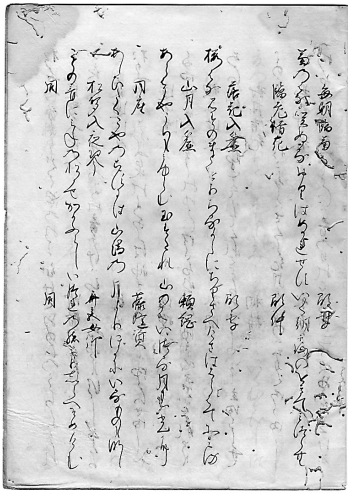
一、便宜上、和歌に通し番号を付した、また（　）内に新編国歌大観番号を付した。



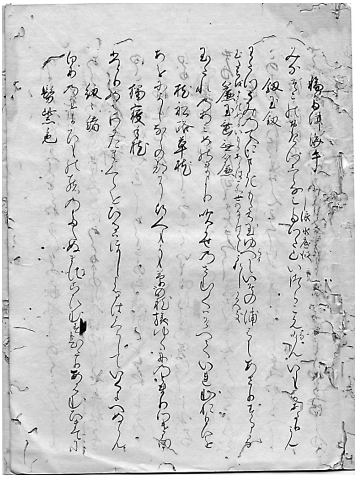
（一オ　巻頭）



（三十七ウ　巻末）



（五オ　和歌欠脱部分）



（三十六オ　行間挿入歌）

和歌一字抄■哥三百六十首 付証哥百十首

客 友 誰 独 動 越
過 招 来 不来 臨 入
遇逢 不逢 対向 留 不留 宿
帰 不帰 尋 伝 望眺望 見看
聞聴 未聞 待 惜 悔 鳴
驚駭 興 翫 愛 択撰 不択無撰
已 砕 冒 凌凌= 踏 結
閉 染 告 伴 談 契
催 意情心 思憶述懐 知 不知 不弁
忘 不忘未忘 厭 未飽 交 比
寄 依 不依 及 纔 自
未遍 猶尚 各 不改 不実(ママ) 同
似 如不如 毎 皆 不与 多
少 有 無 一 不一 不定
為作 言志 茆事(ママ) 証哥

(九行アキ)

」一ウ

」一オ

客依月来　三条大納言

1 (597) わすれにし人もとひけり秋のよは月いて（てはと）ゝこそ待へかりけれ

樹陰留客　顕季

2 (598) あふさかのせきならねとも夏やまのこのしたかけも人はとめけり

野花留客　俊頼

3 (599) 秋くれはやとにとまるを旅ねにて野へこそつねの住家なりけり（れ）＝

野客吹笛　家経

4 (600) 笛の音は月にたかくそきこゆなる道の空にて夜やふけぬらむ

藤経衡

5 (601) 旅人のふきてすくなるふゑの音をまつやとならはきぬときかまし

向花恋友

6 (607) 花さくら匂ふをあかすなかむれはたのめしほとそいとゝ恋しき

月前待友　家経

7 (608) 秋よりもみるほとひさし夏のよの月には人をまつへかりけり

雪中待友　俊頼

8 (610) こぬもうしいさゝはまたし山里につもれる雪も友ならぬかは

花為春友　同

9 (609) ちらぬまは花を友にてすきぬへし春より後のしる人もかな

」二オ

泉為夏友　同

10 (611)
たつのいけ(=ち)のうるまのしみつ涼しくて今日そかひある心ちこそすれ
虫為夜友　同

11 (612)
秋のよを誰もともにかあかすらむ虫の音きかぬ人にとはゝや
月毎秋友　同

12 (613)
思ひくまなくてもとしのへぬる哉物いひかはせ秋のよのつき
月旅中友　顕季

13 (614)
舟出してすまのうらはによもすから月の光のさすをこそみれ
月旅宿友　忠命法橋

14 (615)
草まくらこのたひねにそおもひしる月より外のともなかりけり
松為千年友　経信

15 (618)
うへてみるちとせの松の木たかさにわかおいらくのおもほゆるかな
松遐年友　顕季

16 (619)
ちとせまてすむへきやとのためしとて岩ねの小松けふそうへつる
松久友　俊頼

17 (620)
きみもしる松もむかしのふたはよりひさしくもよを過にけるかな
遠花誰家　坂上定成

18 (622)
よそなからおしき桜のにほひかなたれわかやとの花とみるらむ
卯花誰垣　太政大臣

」二ウ

19 (623) かみやまのふもとにさける卯花はたかしめゆひしかきね成らむ
卯花誰家　俊頼

20 (624) なにかそのおを=おのかかきねの卯花をみぬにてしりぬものゝふそとは
独聞郭公　藤経衡

21 (625) われならぬ人はねにけり時鳥きゝやしつると誰にとはまし
月照孤舟　師賢

22 (626) みなれさほとらてそくたすたかせふね月の光のさすにまかせて
晩風動簾　行宗卿

23 (629) 夕されはみすふきかくる秋風におさふる袖のしとろなるかな
越山見花　俊頼

24 (630) 白妙の花のこすゑにめをかけていふきのみねをおりそわつろら=ふ
夏日越関　同

25 (631) 夏くれはゆきかふ人をあふさかのせきはし水にまかせてそみる
郭公暁過　行宗卿

26 (632) あまの戸をゝしあけかたの時鳥いつくをさして鳴わたるらむ
花招客　永源

27 (633) ほりうへしかひも有かなさくらはなゆきかふ人もすきかてにして
同　橘為仲

28 (634) 春ならぬおりにも人をとひしかははなゆへとのみおもひしものを

」三オ

」三ウ

29 (635)
依月客来　永源法師
われひとりなかめてのみやあかさましこよひの月のおほろなりせは

客依月来　三条大納言
わすれにし人しも=とひけり山里は月てはとこそまつへかりけれ

30 (636)
秋来水辺　藤時房
吹風に岩もる水も涼しきは山かけよりや秋はたつらむ

31 (637)
泉声来枕　太政大臣
音きけはむすはぬ草の枕さへすゝしかりけりやとのまし水

32 (638)
水風晩来　顕季
ゆふつくよむすふ泉はなけれともしかのうらかせ涼しかりけり

33 (639)
樹陰風来　俊頼
日さかりはあそひてゆかむかけもよしまのゝはき原風たちにけり

34 (640)
難契不来恋（=難雖）　関白
こぬ人をうらみもはてしちきり置しその言葉もなさけならすや

35 (641)
同　顕輔
なか〳〵にたのめさりせはみちのくのとふのすかこもなかにねなまし

36 (642)
緑松臨池　恵慶法師
誰にとかいけのこゝろもおもふらむそこにやとれる松のちとせを

37 (643)
柳臨池水　通宗

」四オ

38 (644)
青柳のうつれるかけを池水のそこの玉もとおもひける哉
菊花臨水　行宗

39 (645)
よしのかはきしのしらきく咲にけりおりくる波に色やさかはむ
毎朝臨菊　顕季

40 (646)
菊のはな咲ぬるおりはめかれせすいく朝露のをきてみつらむ
臨老借花（ママ）　顕仲

41 (647)
（一行アキ）
落花入簾　顕季

42 (648)
桜はなみすのまとをりちるからにちりさへけさははらはてそみる
山月入簾　頼綱

43 (649)
あらはにやうちもみゆらむ玉すたれ山のはいつる月の光に
同座　藤隆資

44 (650)
あしひたくこやのこすには山端の月よりほかにいるものもなし
松声入夜琴　斎宮女御

45 (651)
ことの音にみねの松かせかよふらしいつれの緒よりしらへそめけむ
同　同

46 (652)
松かせの音もみたるゝ琴のねにひけはねのひのこゝちこそすれ
泉声入夜寒　師賢

47 (653)
小夜更ていわ井の水の音きけはむすはぬ袖もすゝしかりけり

」四ウ

」五オ

48 (655)
泉辺逢友　行宗
おもふとてさそふ泉の水ならは袖さしかはしまとひせましや
違不逢　俊頼

49 (658)
たまゆかのおましのゆかにはたふれて心はゆきぬ君なけれとも
頼不逢恋　顕国

50 (659)
あひみむとたのむれはこそくれはとりあやしやいかに立帰るらむ
対月借花（ママ）　相持模=

51 (660)
よのうちはちりおこたらはさくら花月みてものはおもはさらまし
対花日暮　永源

52 (661)
さかりなる花のもとには春の日の暮るもしらぬ物にそ有ける
夕対卯花　資仲

53 (662)
月にこそふせやのすたれあけしかと卯花にまたおろされぬかな
対水待月　基俊

54 (663)
夏のよの月待ほとの手すさみに岩もるし水いくむすひしつ
対泉述懐　俊頼

55 (664)
身のうきにしみかはりたるなけきには玉井の水もゑ(え)や(は)き(よ)めぬ=
対月待秋　懐因法師

56 (665)
みるほともなくて明ぬる夏のよの月につけても秋そまたるゝ
対山待月　土御門右府

」五ウ

57 (666)
有明の月待ほとのうたゝねは山のはのみそゆめにみえける
対家花思野花　嘉言

58 (669)
わかやとの=に=のためしはかりの花みせて空にさかのゝ秋を知かな
対菊惜秋　大江広経

59 (670)
うつりゆく菊をみてこそなけかるれいかにせはかは秋のとまらむ」六オ
同座　源時綱

60 (671)
こゝろなるあ=宿=きの菊たにうつろへはいかゝはすへき秋はつるとは
垣柳留客　経信

61 (672)
青柳のいとしかきねになみよれはたちよる人もたへ=え=ぬ成けり
山花留人　祭主公長

62 (673)
をのゝえはこのもとにてやくちなまし春をかきらぬさくら成せは
卯花留客　俊頼

63 (674)
卯花のさかりならすは山里にくる人ことになかゐせましや
同座　源雅光

64 (675)
卯花のさかりになれは山かつの垣ねしもこそ住うかりけれ
郭公留客　俊頼

65 (676)
たかために旅ねをすれはほとゝきすまたともなかてさよふかすらん」六ウ
野花留客　同

66 (677)
秋くれはやとにとまるを旅ねにて野へこそつねのすみか成けれ

紅葉留客　素意

67 (678) ふるさとにとふ人あらはもみちはのちりなむ後をまてとこたへよ

留船聞鶯　国基

68 (679) きゝすてゝすきしゆかねはうくひすの声そふ(はイ)(ママ)るちのとまり成けり

残菊留秋　顕季

69 (680) 冬にいまなりぬときけとたのまれす時そとみゆる白(き)くのはな

同座　俊頼

70 (681) おしまれてはとふく秋もうつろへる菊をは=ゑ(え)こそみすてさりけれ

来不留恋　顕季

71 (683) 玉津嶋きしうつ波の立かへりせないてましぬなこりひさしも

同=座　俊頼

72 (684) 思ひ草はすゑにむすふ白露のたま〳〵きてはてにもたまらす

露光宿菊　無名

73 (685) かさしにはおらまほしきをしら菊の花にやとれる露やこほれん

旅宿蛍火　源雅光

74 (686) 夜もすから蛍はかりはほのめけと人かけもせぬくさまくらかな

旅宿待月　頼家

75 (687) おほつかな有明の月のいてねかしいかなる山のふもとなるらん

月前旅宿　顕季

」七オ

76 (688)
松かねに衣かたしきよもすからなかむる月をいもやみるらん
旅宿月　三条大納言

77 (689)
われこそはあかしのさとに旅ねせめおなし水にもやとる月かな
旅宿落葉　俊頼

78 (690)
ふきはらふあらしとともに旅ねする涙もともにこのは(お)つなり」七ウ
旅宿時雨　瞻西上人

79 (691)
いほりさすならの木かけにもる月のくもるとすれはしくれふるなり
旅宿冬夜　経信

80 (692)
旅ねするよとこさへつゝあけぬらしとひとふかねの声きこゆ也
旅宿雪　顕季

81 (693)
まつかとにおはなかりしきよもすからかたしく袖に雪は消(え)つゝ
郭公欲帰　行宗卿

82 (696)
けふはさは声なおしみそほとゝきすかへる山路のかたみにも(せ)む
郭公帰山　顕季

83 (697)
ほとゝきすふたむら山をたつねみむいりあやのこゑやけふはまさると
帰路落葉

84 (698)
家にいもはくものふるまひしるからむ道さまたけにちるもみち哉
喚不帰　俊頼

85 (699)
みかりのにかさなかれするはしたかのこゑにとつかぬうらみをそする」八オ

86 (700)
山家尋人　範永
尋ねつるやとはかすみにうつもれて谷のうくひす一声そする

87 (701)
暁尋花　顕季
夢さましいそきそきつる山桜あさふくかせのたえぬさきにと

88 (703)
尋聞郭公　橘成元
はる〳〵といくたのもりに尋きて山ほとゝきす一こゑもきく

89 (705)
風伝隣花　坂上定成
さくらさくとなりにいとふ春風は花なき(さと)そうれしかりける

90 (706)
人伝聞郭公　関白
時鳥きゝつとかたる人ことにいくたひとひつあかぬあまりに

91 (707)
望山花　範永
霞たつ外山のはなも咲にけりふりつむ雪を春の(けて)かし

92 (708)
山家望月　藤隆資
もろともにすむ月なくは山里にひとりや秋の夜をあかさまし

93 (709)
水辺望天河　兼澄
君か代にはしめてすめる月なれは天河なみたちかよふらし

94 (710)
水辺秋望　経信
もみち見しおりならねとも大井河秋のけしきも浅からぬ哉

山居眺望　隆俊

」八ウ

95 (711)
いりしより都のかたをなかめつゝ山のたかねにけふ(も)くらしつ
海上晩望　国基

96 (713)
よもすからいさりやすまのゆふくれに奥津しまへにかよふあまふね
海上遠望　関白

97 (714)
あまのはらこき出てみれは久堅の雲井にま(か)ふ奥津しら波
旅宿遠望　良暹

98 (715)
わたなへや大江のきしに旅ねして雲井にみゆるいこま山かな
野径眺望　顕輔

99 (716)
ますらをかあさむつのへをみわたせは雲井をかけてかへる(た)くなり(ママ)
雪中眺望

100 (717)
くれなゐにみえし梢も雪ふれはしらゆふかくるかみなみのもり
見月前花　兼房

101 (720)
月かけに花みる夜半のうき雲はかせのつらさにおとらさりけり
晩見藤花　俊頼

102 (721)
むらさきにいくしほそめて藤のはな夕日まかきのはゐを(さ)すらむ
晩見野草花　同

103 (722)
くれぬとも花のあたりにやとりして秋はの。りと人にいはれむ
雪中見松　為頼

104 (723)
あまたとし雪はつめともわかやとの松のみとりそかはら(さ)りける

「九オ

「九ウ

105 (725)
山家聞鶯　経信
うくひすの音こそはるかにきこゆなれこや山里のしるしなるらむ

106 (726)
夜聞郭公　俊頼
あけは又(まつ)ちらさておらんほとゝきす花たちはなのはたに(ママ)鳴なり

107 (727)
山家聞鹿　経信
秋ふかみ山かたさひ(に)家ゐして鹿のねさへにきけはかなしき(も)

108 (728)
暁聞擣衣　橘為仲
あくるまてしてうつこゑのたえせね(は)たかためいそく衣なる(ら)む

109 (729)
旅宿聞笛　俊綱
草まくらむすふねさめの笛の音にふきあはすなりみねの松かせ

110 (730)
夜聞落葉　橘則季
夜半にちる音はすれとももみちはの色をしみねは時雨とそおもふ

111 (731)
旅雁聞雲　恵慶
行とくと雲路をならす雁かねのつねに旅とはおもはさら南

112 (733)
未聞郭公　顕季
夏ころもたちきる日よりけふまて。まつ(は)にきなかぬ時鳥かな

113 (734)
山家待花　同
あしひきのかた山きしに家ゐしてみねの桜の花まつわれそ

対月待郭公　為義

」十オ

114 (735) かくてのみなかすなりせは時鳥月をのみゝる身とやなりなむ
顕季

115 (736) 夏衣たちにし日よりほとゝきすぬるよもなしにいまそ鳴なる
同

116 (737) おもふとて露うちはらふみ(ママ)にゆかむ花のゝはきのはやもさかなん
白河院

117 (738) かひもなき心ちこそすれさほしかのたつ声もせぬ秋萩のにしきは
=秋萩盛待花鹿
三宮

118 (739) 秋のよの月は山路をいてねともかねてこゝろにいりにけるかな
俊頼

119 (740) はやくいてゝ門田にやとれ秋の月はのほる月のかすやみゆると
嘉言

120 (741) たかせ舟さほのたちともみえぬかな月をのせてそいつへかりける
六条宮

121 (742) またちらぬさきにもみちもみるへきになかつき(か)けの出かてにする
頼家

122 (743) 山さとにあさけのけふりたなひくを春にさきたつかすみとおもはむ
源能基

123 (744) 雪ふかしみ山かくれの鴛のわれはかりこそ春をまつらめ
雪中待春

待草花
待聞郭公
待秋夜月
山家待月春
=月
待秋夜月
田家待月
秋夜待月
船中待月

」十ウ

124 (745)
待客聞郭公　顕季
もろともにきかまし物をほとゝきすたのめし人のはやきまさなん
雨中待人　俊頼
雨ふりし日はあやにくにこし物をこはたれなれや音信もせぬ
花残待人　国基
たつねくる人もやあるとあしひきの山し(たか)けに花そのこれる
老人惜花　範永
ちる花もあなれとみすやいそのかみふりはつるまておしむ心を
老人惜春　橘俊成
おいてこそ春のおしさはまさりけれいまいくたひもあはし(と)おもへは
夏夜惜月　輔親卿
夏のよの雲路はとをくなりまされかたふく月の行やらぬまて
終(夜)惜秋　藤隆資
あけぬとも秋のなこりとみゆはかりきくたにしはし立とまりなん
悔離別　俊頼
今さら(に)いもかへさめやいちしるくはす(ママ)のみや(こ)こしはさすとも
悔会合
いにしへをおもへ(はか)なししめのうちにさかきさすまはおり(ママ)まし物を
鹿鳴秋萩　無名

」十一オ

」十一ウ

133 (757) 下葉より物おもふ萩にいとゝしく鹿の音をさへ鳴てきかする
旅雁鳴雲　俊頼

134 (758) はつかりのなきつる空のうき雲をとりのあとゝもおもひけ(る)かな
花駭定心　永源

135 (759) ともすれはよもの山へにあくかれてゆかはおられぬ花さくら哉
擣衣驚眠　俊頼

136 (760) 衣うつきぬたの音に夢さめてことそともな(く)ぬるゝ袖かな
郭公驚眠　藤永実

137 (761) まちかねてまとろめはまたきなくなりひとくるしめのほとゝきす哉
同座　俊頼

138 (762) またぬてふわかなもたてし時鳥なきをこしつと人にか(た)るな
郭公驚夢　藤原定俊

139 (763) まちかねてまとろむ夢にほとゝきすきくとみつるやうつゝなりけり
同　太政大臣

140 (764) おとろかす声なかりせは郭公またうつゝにはきかすやあらまし
波声驚夢　源重之

141 (765) こひしさは夢にのみこそなくさむれつら(き)は波の音にそ有ける
秋花(催)興　顕季

142 (767) よとゝもに野へに心やあくかれむもとあらの萩の花しちらねは

」十二オ

143 (768) 田(家)秋興　兼房

秋くれはあさけのかせのてをさむみ山田のひたをまかせてそみる

」十二ウ

144 (769) 同　仲実

ゆふされ(の)あしのまろやにそよかれて門田のいなはときつかせ吹

145 (770) 同　俊頼

山田もる□(一字アキ)きはふせやに風ふけはあせつたひしてうつらおとなふ

146 (771) 河辺興　同

おかみかは秋のはひゑにあゆつりてあそふもさめすそのこおもへは

147 (772) 樹陰翫泉　贈太政大臣

松かねに岩もるし水むすふよはわ(か)身ひとつに秋(は)来(にけ)り

148 (773) 翫野花　師賢

さらぬたに心のとまる秋のゝにいとゝもまねく花すゝきかな

149 (774) 翫池上月　白河院

池水にこよひの月をうつしもて心のまゝにわかものとみる

」十三オ

150 (775) 翫宮庭菊　長房

あさまたきやへさく菊のこゝのへにみゆるは霜のをける成けり

151 (776) 女郎花翫露　源仲通

女郎花けさはすかたのまさるかな露のむすへる玉かつらして

毎年愛花　三宮

152 (779) としことにちれは物おもふ花の色をみにといさなふわか心かな
宇治前太政大臣
153 (780) いつれをか心にそめむしくれつゝくれなゐふかくてれる紅葉ゝ
藤兼房
154 (781) もみちはゝみなくれなゐに成にけりいつれかしほにすきてみゆらん
平棟仲
155 (782) かつみてもあかすたつぬるもみちかな去年よりふかき色はありやと
経信卿
156 (785) 久かたのそらにかくれる雲の月いつれの里もかゝみとそみる
顕季
157 (786) 柴の庵(も)玉のうてなも空はれておなしこゝろにすめる月影=哉
花無択処
158 (787) いつくともわ(か)ぬさくらの色なれは尋いたらぬくまのなきかな
瞿麦勝衆花
159 (788) たつたひめことにやそめし春も秋もとこなつにしく花な(か)りけり
経衡
160 (789) 千とせつむ君そしるへきとこなつに匂ひ久しき花はあ(り)やと
橘俊宗
161 (790) なにことに春のあけほのおとらましさやけき月のかけなかりせは

」十三ウ

162 (791) 秋月勝春花　為義

みるほともなくてちりにし花よりものとけき秋の月はまされり

落葉勝花　三条大納言

花よりも心そとまる冬草のかれのゝうへにちれるもみち葉

」十四オ

163 (792) 白菊戴露　藤成高

164 (793) いつのまにむすほゝれてか白露のまたうつろはぬ菊に=おくらむ（を）

庭草戴雪　範永

165 (794) 荻の葉にふりかゝりたる雪みれはわかもとゆひそまつしられける

同　隆経

166 (795) としふかく庭の木の葉もなりぬれは雪をいたゝく物にそ有ける

庭移秋花　京極前太政大臣

167 (796) わかやとに秋のゝへをはうつせりと花みにゆ（か）む人につけはや

野花移庭　範永

168 (797) 心ありて露やをくらむ人よりもにほひまされる秋萩のはな

柳（払）池水　経衡

169 (798) 池水のみくさもとらて青柳のはらふしつえにまかせてそみつ

風払落花　賀茂成助

」十四ウ

170 (799) わか心い（かに）せよとてちりつもる花さへさそふ風のなからむ

旅宿払霜　国房

171 (800) 物さひし旅ねのとこにかたしきの袖もてはらふ冬のよの月
見花不払庭　嘉言

172 (801) はなちれは手もふれてみる庭の面を心にもあらて風やはらはむ
惜花不払庭　兼澄

173 (802) 春のうちはちりつ。るともきよめせて花にけかるゝやとりしらなむ
同　為義

174 (803) さくらはな庭もはたれにちりつめと匂ひをおしみたえすこそみれ
荒屋聞虫　嘉言

175 (804) わかやとはあさちかはらにあれたれとむしの音きくそとりところなる
月照荒屋　俊頼

176 (805) 閨のうちのひまをかそへてもる月は空よりもけにくまなかりけり
風砕野花　仲通

177 (806) 身のうさはのわきにあへる花なれやちりひちになる心こそすれ
冒雨見花　俊頼

178 (807) ちる花のしつくにぬるゝ袖なれはかはくもおしき物にそ有ける
野径凌花　橘俊宗

179 (808) 露しけきをのゝ萩はらすきゆけは花すり衣きぬ人そ(な)き
同　源師光

180 (809) 衣手にうつしてをみむ花の色をわけてそ(き)つる野路の朝露

」十五オ

181 (810) 山路踏花　大江広経
おしと(み)る花とみれともいかにせむよきてゆくへき山路ならねは

柳(結)落花　花園左大臣
ちる花の柳のいとにむすはれてあらぬしつえにほひぬる哉

182 (811) 庭樹結葉　経信
玉かし(は)庭も葉ひろになりにけりこや夕しての神まつるころ

183 (812) 已上同座　兼房
庭の面は月もらぬまてなりにけり梢に夏の日かすつもりて

184 (813) 氷結波不流　六条宮
あさ氷水もかよはすなりにけりなにをよすらむたこの浦波

185 (815) 谷水結氷　花園左大臣
谷川のよとみにむすふ氷こそみる人もなきうらみなりけり

186 (816) 氷閉水鳥　俊頼
夜をさむみむすふ氷や水鳥のかつく岩間のせきとなるらん

187 (817) 氷閉河水　同
あすか河ふちは氷にとちられていかてか瀬にもなりかはるらん

188 (818) 氷閉池水　同
夜もすからまの丶かやはらさえ〳〵て池のみきはも氷しにけり

189 (819) 梅花染衣　橘則永

」十五ウ

」十六オ

190 (820)
梅かゝの袖にうつりてこよひさへいもかあたりとおもひけるかな
池水染藍　行宗卿

191 (821)
池水をたれかそむらんみそのふのあゐより色のふかくみゆるは
震染紅葉　俊頼

192 (822)
ふりきふす(ちらす)しくれにたへてかゝる山(み)かけみるはかりもみちしにけり
梅告春色　顕季

193 (823)
雪のうちにつほみにけりな梅の花春あ(け)かたになりやしぬらん
鶯告春　俊頼

194 (824)
春そとはかすみにしるし鶯よ花のありかをそことつけなむ
晩風告秋　同

195 (825)
ゆふまくれわひし(き)風におとろけは荻のはそよく秋は(き)にけり
草花告秋　源縁

196 (826)
さきにけ(る)くちなし色のをみなへしいはねとしるし秋のけしきは
同　雅兼

197 (827)
咲そむるあしたのはらの女郎花秋をしらするつまにそ有ける
二首同座　顕季

198 (828)
露むすふ秋にははやくなりにけりあさちかはらにうつろふ(み)れは
客伴月来　源仲正

199 (830)
とゝめはやこよひの月にさそはれてあくかれ(き)たる人のこゝろを

」十六ウ

月前談往事　　俊頼

200 (831) ありしよをむかしかたりになしはて、かたふく月を友とする哉

花契千年　　兼房

201 (833) いはねとも色にそしるき桜花君かちとせの春のはしめを

菊契千年　　顕季

202 (837) 色も香もむつましきかな菊の花ちとせの秋のかたみとおもへは

落葉契千年　　橘則季

203 (839) ちる花のおしまるゝ哉もみちはをみるへき秋はちとせとおもへは

花契遐年　　待賢門院権中納言

204 (840) こゐ(わ)でくる君も久しく菊のはなともにちとせのちきりをそする

松契遐年　　俊実卿

205 (841) 水の面に松のしつえのひちぬれは千とせは池の心なりけり

鶴契遐年　　顕季

206 (842) むれゐたる鶴のけしきにしるきかなちとせ(す)むへき宿の池水

松樹契久　　俊頼

207 (843) くらひ(ゐ)山ひさしき松のかけにゐてたのむみさへもとしをふるかな

水石契久　　同

208 (844) そまかはをたれそのかみにせきそめてたえぬ岩間の瀧となしけん

郭公催恋　　俊頼

」十七オ

」十七ウ

209 (849)
いと(丶しく袖)そしほる丶時鳥なくねや恋のしるへなるらむ
秋花催興　顕季

210 (850)
よと丶もにのへにこ丶ろやあくかれむもとあらの萩の花しちらすは
恋催旧意　同

211 (851)
おもひいてよあまのかく山よそにてもき丶てわたらむといつか契りし
山家春意　橘俊宗

212 (858)
みわたせはのさはのあしもつのくみぬいまは門田のたねまかせてむ
已上一座　国基

213 (853)
かすみつ丶はる丶ときなき山里はおほつかなくて春や過なむ
花嫁定心　永源

214 (854)
ともすれはよもの山辺にあくかれてゆかすおられぬ花さかりかな
慶増僧都

215 (855)
にしにのみかへる心をさくらはなよしのやまへにあくからすかな
月前遠情　俊頼

216 (856)
いつもにははれぬか雲にとちられてこよひの月やおほろなるらむ
月前旅情　顕季

217 (857)
まつかねに衣かたしきよもすからなかむる月をいもみるらめや
夜思梅花　能因

218 (860)
さくらさく春は夜たになかりせは夢にも物はおもはさらまし

」十八オ

219 (861)
あけはまつたつねにゆかむ桜花これはかり(た)に人におくれし
夜思落花　隆源

220 (862)
ころもてにひるはちりつる桜花よるは心にかゝるなりけり
雨夜思花　嘉言

221 (863)
春のよのあけしはてすはいてゝみむこよひの雨に花さきぬらん
雨夜思瞿麦　能因

222 (864)
いかならむこ(よ)ひの雨にとこなつのけさたに露のおもけ成つる
雨夜思萩　長能

223 (867)
ぬれつゝもあけはまつみむみやきのゝもとあらの萩しほれしぬらむ
雨夜思月　清成法橋

224 (865)
雨ならぬこよひなりせは月かけのもるにうれしきいたまならまし
雨中思月　為義

225 (866)
たちかくすあまのうき雲なかりせは山のはいつる月はみてまし
思野花　良暹

226 (868)
あさつゆにおもふこゝろは露なれやかゝらぬ花のうへしなけれは
夜思落葉　行宗

227 (869)
おちつもるこのはも色はありけれと夜をてらさぬそかひなかりける
夜思山雪　永源

橘元任

」十八ウ

」十九オ

228 (870)
冬のよのふけゆくまゝにさゆるかな四方の山へに雪やつむらむ
見月思都　為義

229 (871)
わかことそ都の月もおもふらめ=むたゝにやむへき夜半の月か=なは
思貴人　俊頼

230 (872)
谷川のみかけにくつるまろすけの雲ゐるみねのいはれにそ思ふ
花下述懐　経信

231 (873)
たきのいとにちりてなかるゝ花みれはぬひたにあへぬにしきなりけり
心中述懐　念西入道

232 (874)
いとゝしくさひしき秋のゆふくれにまとうつ雨の音さへそする
瀧音知春　斎院宣旨

233 (879)
おちたきる心とけたる瀧の糸に春きにけりときこゆなるかな
依水(知)山花　顕季

234 (880)
ちりかゝるほそ谷川そ山さくらたつぬる人のしるへなりけり
野草知夏　源縁

235 (881)
いはねとも夏とはみえぬおふるよりあさちましりのやまとなてしこ
藤時房

236 (882)
さいたつましけりにけらし夏山のすそのゝみちもたえ〳〵にみゆ
早涼知秋　経信

237 (883)
うたゝねのさむくもあるかなから衣袖のうちにや秋のたつらむ

」十九ウ

対鏡知身老　無

238 (884)
ますかゝみおもてにたゝむしはにこそとしの(か)さなる数はみえけれ
恋不知程　俊頼

239 (887)
せきあへぬ泪にてこそわか恋のつもるほとをはしるへかりけれ
依竹不弁秋　師経卿

240 (891)
みとりにて色しかはらぬくれたけはよのなかきをや秋としるらむ
依花忘家　顕季

241 (892)
よとゝもに野へにてとしやくらさましときはにさける桜成せは
花下忘帰　良暹

242 (893)
とふ人もやとにはあらし山桜ちらてかへりし春しなけれは
能宣

243 (894)
ふるさとへかへらむ道もおもほえす花をたつねてみにはきにしを
聞郭公忘帰　顕季

244 (896)
時鳥声あかなくにたつねきていくたのもりにいく世へぬらん
対泉忘夏　土御門右大臣

245 (897)
むすふ手の秋よりさきにすゝしきは泉の水に夏やこさらむ
資仲卿

246 (898)
むすふ手のあたりすゝしき泉には春くれしより秋やきにけむ
家経

」二十オ

247 (899) したくる（ママ）ゝ岩間の水のあたりにはあふきの風をかる人もなし
依月不忘秋　俊頼　」二十ウ

248 (900) はらの池のあしまにやとる月かけはわかれし秋のかたみなりけり
未不忘春意（=）　経信

249 (901) ふるさとの花のさかりは過ぬれと面かけさらぬ春の空かな
対花厭風　俊頼

250 (902) 青柳の糸にてかせをゆひとめて花のあたりへやらしとそ思ふ
厭賤恋　同

251 (903) あやしきもうれしかりけりおとしむるそのことのはにかゝるとおもへは
望花未飽　関白

252 (904) いまよりは花みぬ身とやなりなましあかぬこゝろもくるしかりけり
郭公未飽　行尊僧正

253 (906) さしもなそおしみそめけむ時鳥ゆきのみやまの法の声かは
俊頼　」二十一オ

254 (905) ほとゝきすたゝ一こゑの名残こそまつにはまさるなけきなりけり（れ）（=）
桜。柳。交枝

255 (907) あすもこむしたり桜のえたほそに（ママ）柳のいとにむすほゝれけり
鹿声比嵐　同

256 (908) みむろ山しかのなくねにうちそへて嵐ふくなり秋のゆふくれ

257 (909)
春情寄風　（実）政卿
春ことにみるとはすれと桜花やとてもとしのつもりぬるかな

258 (910)
秋情寄萩　俊頼
秋はきをこゝろにかけておかさきのおほろあしけをなつみてそゆく

259 (911)
情寄女郎（ママ）　通俊卿
朝ゆふにおもふもしらす女郎花こゝろへたつるのへのあきかせ

260 (912)
永源
こゝろありておりもてそみる女郎花まねく(す)ゝきのうらむはかりに

261 (913)
依花待春　花園左大臣
なにとなくとしのくるゝはおしけれと花のゆかりに春をまつかな

262 (914)
依花惜春　坂上定成
にほふことおりをもわかぬ花ならは春をかきりとなけかさらまし

263 (915)
依水知山花　顕季
ちりつもるほそたつ（ママ）川そ桜はなたつぬる人のしるへなりける

264 (916)
依水知山紅葉　範永
色よはる岩間の水をむすはすは尾のへのこすゑみにやゆかまし

265 (917)
依水月明　行宗卿
かねてよりすむ池水のなかりせはそこさへてらす月をみましや

依月夏涼　顕季

」二十一ウ

266 (918) なかむれはすゝしかりけり夏のよの月のかつらに風やふくらむ
秋依月勝　橘俊一
」二十二オ

267 (919) なにことに春のあけほのおとらましさやけき月の秋なかりせは
客依月来　三条大納言

268 (920) わすれにし人もとひけり秋のよは月てはとこそ待へかりけり（れ）
依月客来　永源

269 (921) われひとりなかめてのみやあかさましこよひの月のおほろ成せは
恋不依人　俊頼

270 (922) くれなゐの袖にはつれしまみよりもなれかつゝりのわかけをそ思ふ
照射及晩（暁）　顕季

271 (923) ともせともこよひもあけぬいたつらにあふさか山もかひなかりけり
花纔残　同

272 (924) さくら花青はか中にちりのこるこすゑは春（ママ）はとまりなるらむ
落葉纔残　源仲政

273 (925) もみちはのあしろのひをにましらすはちるは(か)りをもゑりてみましや
纔聞郭公　仲実
」二十二ウ

274 (926) ほのかにも鳴わたるなり郭公こよひはかりをなにしのふらむ
花自有情　経信

275 (929) ものをこそいはねと花も心あれはさくへき程をすくしやはする

276 (930)
月夜自涼　俊頼
ころもてもやゝはたさむし夏のよの月のひかりは秋のそらかは

277 (931)
花未遍　範成
さきはてぬこすゑおほかるやとなれは花もにほひも久しくやみむ

278 (932)
郭公不遍　俊頼
時鳥つきわかしとやおく山のこすゑかくれに声ならすらむ

279 (933)
紅葉未遍　家経
中〳〵にかたえもみえぬおりにこそあらはにはゆる色はみえけれ

280 (934)
池氷猶残　嘉言
むら〳〵に氷のこれる池水はところ〳〵や春はたつらむ

281 (935)
藤花尚盛　国基
やとからか夏になれとも藤のはなうつろふ色のみえすも有かな

282 (936)
紅葉尚残　通俊卿
いかなれはふなきの山のもみちはは秋はすくれとこかれさるらむ

283 (938)
各行見花　藤敦家
秋はきのさきぬる野へをみるのみそ心は人にかはらさりけり

284 (939)
竹不改世色=　堀河院
千代ふれと色もかはらぬくれたけはなかれて後のためし成けり

仲実

」二十三オ

285 (940)
葉かへせぬ竹のはすゑに吹かせのおさまれる世とひゝくくれかな
梅花不異月　嘉言

286 (942)
さかりには月さやかなる梅のはなちらはや(や)みにならむとすらむ
毎秋同月　三宮

」二十三ウ

287 (943)
としふれはふちとせになる水のおもにすみかはらぬは秋のよの月
経年同恋　関白

288 (944)
としふれとわかときはなる我恋やいろもかはらぬすみよしの松
春雪似花　伊勢大輔

289 (945)
朝みとり春の空よりふるゆきは花ちる里のこゝちこそすれ
草蛍似露　式部

290 (946)
草しけみをける露かとみえつるは(す)たく蛍のひかりなりけり
卯花似夕顔　兼房

291 (947)
けさみれはむかひなましをゆふ顔にかきねにしろくさける卯花
夏月似雪　良暹

292 (948)
夏のよに雪かとみゆる月かけのひるはきえぬる心ちこそすれ
月光似昼　源頼実

」二十四オ

293 (949)
秋のよのくまなき空の月かけはなけきやすらむかつらきの神
叢露似玉　相持模

294 (950)
たまの緒のみたれたるとて草のはをむすはゝ袖に露やこほれむ

295 (951)
水声似雨　行宗卿
むらさめの音にたかはぬ山かわにいかてかみつのまさらさるらん

池氷似鏡　兼房
風さむみむすひし水のこほれるはけさみる人のかたみ成けり

296 (952)
晩涼如秋　範永
松かせの夕日かくれにふく程は夏すきにける空かとそみる

297 (956)
国基
夏なれとゆふかせすゝし小萩原下はや秋の色に成らむ

298 (957)
義孝
夏の日の暮行空のすゝしさに秋のけし(き)を空にしる(かな)

299 (958)
晩風如秋　顕季
ゆふされの風のけしきのすゝしさにしかなきぬへき心ちこそすれ

300 (960)
竹風如秋　俊頼
秋きぬとたけのそのふになのらせてしのゝおすゝき人はかるなり

301 (961)
松風如秋　永胤
みなつきもまつのこかけの涼しさははつ秋風にことならぬかな

302 (962)
水風如秋　俊頼
さはへなるほたるもかせにはかられてけふを秋とや雁につくらむ

303 (963)
水岸如秋　為義

「二十四ウ

304 (964)
河かせのすゝしき音をおもふにはせこかわさ田もかり初つらむ
隆経

305 (965)
菊のうへの露なかりせはいかにしてこよひの月をよるとしらまし
家経

306 (966)
もみちゝる音はしくれのこゝちして梢のそらはくもらさりけり
頼実

」二十五オ

307 (967)
木のはちるやとはきゝわくことそなき時雨するよも時雨せぬよも
基長卿

308 (968)
なよ竹のおとにそ袖をかつきつるぬれぬ(に)もこそはかせとしりぬ(れ)る
兼房

309 (969)
風ふけはおさゝかはらにすむ人はたゝ一むらの雨かとそきく
源頼長

310 (970)
あしのほのなみよるおちのみきはにはふる(れ)ともみえぬ雪そつもれる
顕仲

311 (971)
露すかる尾花かうれをけさみれはたまちる里の心ちこそすれ
経信卿

312 (972)
うつろへる(は)にしきにまかふ色をみてむへむ(ら菊)と人はいひけり
遐齢如松

」二十五ウ

313 (973)
二葉なる松をひきうへてたれもみなおなしちとせのかけをこそまて

月不如秋　太政大臣

314 (975) すみのほる月のかつらはつねよりももみちの秋やてりまさるらむ

毎山有春　入道中納言

315 (976) わかやとの梢はかりと見しほとによもの山へに春はきにけり

毎家有春秋　白河院

316 (977) やとことに同し秋をやうつすらんおもかはりせぬをみなへしかな

毎年見花　永源

317 (978) としをへてことしはかりとおもひつゝおほくの春の花をみるかな

源縁

318 (979) 春ことにみれともあかぬ山さくらとしにや花のさきまさるらむ

毎朝望菊　顕季

319 (980) 菊のはなさきぬる時はめもあはすいく朝露のをきてみつらん

毎夜待郭公　俊頼

320 (981) 時鳥よころ心をつくさせてけふ(ママ)かすかにほのめかすかな。る

同

321 (982) ほとゝきす待にしるしのあらされはねぬよの数に声をきかはや

月毎秋友　同

322 (983) 思ひくまなくてもとしのへぬるかなものいひかはせ秋のよのつき

月毎水宿　肥後

」二十六オ

323 (984)
山のはにいてゐる月はひとつにてあまたの水にすめるかけかな
山花皆梅花　国基

324 (987)
なつかしきかのみこそすれ山里は梅のにほはぬやとしなければ
山路皆花　慶基法師

325 (988)
山さくら道みえぬまてちりしきて花の都(の)かたそしられぬ
山皆紅葉　経衡

」二十六ウ

326 (989)
をしなへて山はもみちに成にけり秋はときはのもりやなからむ
郭公不定乏　俊頼

327 (990)
今こそはふたむら山のほとゝきすこゑおりはへてあやに鳴なれ
梅香夜多　皇后宮下野

328 (991)
色みえて梅のかはかりにほふかなよるふく風のたよりうれしき
花契多春　経信

329 (992)
もゝしきやみかきか原のさくら花春したへすはにほはさらまし
松契多春　同

330 (993)
かすか山たかねにたてる松かえのあひくる春は神やしるらむ
菊送多年　関白

331 (994)
君か代をなかつきにさく菊のはなへにける秋もかきりなき哉
花漸少　同

」二十七オ

332 (998)
日をへつゝ梢あらはになしはてゝしつくに残る花はひとふさ

333 (999) 顕輔
くれてゆく春の日かすもちるはなのなかはにおほくすきにける哉
俊頼

334 (1000)
わかくれはしはしもすまへさくら花つゐには風のねにかへるとも
郭公語少　橘成元

335 (1002)
五月雨をまつらの山のほとゝきすほのかになきてすきぬなるかな
春情有花　顕季

336 (1003)
こゝろみにさてもや春はうれしきと花なきとしにあふよしもかな
顕輔

337 (1004)
わかこゝろ春の山へにあくかれて花ゆへ人にうらみられぬる
毎家有秋　白河院

338 (1006)
やとことにをなし秋をやうつすらんおもか(は)りせぬ女郎花かな
無風花散　三条大納言

339 (1008)
山さくら春のかすみにつゝまれてかせにしられぬ花も散けり
隆経

340 (1009)
ふくかせにさそはれねともちりぬれは花をうしとも思ひぬる哉
月光無夜　資仲

341 (1010)
雲はれてふけゆくそらの月みれは秋はよるなき心ちこそすれ
雪花無定樹　為義

」二十七ウ

342 (1011) 春またて梅もさくらも雪ふれはおなし色なる花そさきける
杜若一叢　源仲正

343 (1014) こき花はにほはぬさはにむらさきのひとむらこなるかきつはたかな
一葉散林　国房

344 (1015) いつしかと初秋かせにやましなのおかへのくるすくち葉ちるらし
秋唯一日　藤隆資

345 (1016) たつぬれは秋はけふにてくれぬめりのへのけしきは露とかはらて
秋花不一　範永

346 (1017) われはなををみなへしこそあはれなれおのへのはきはよそにてもみむ
経衡

347 (1018) 秋くれはちゝにこゝろそわかれけるいつれのはなもあかぬにほひに
国房

348 (1019) 色〳〵の花さきけらし秋のゝはをく白露のなにかたかはむ
義孝

349 (1020) こまなへてのへに立いてゝなかむれはこゝろ〳〵に花さきにけり
堀河右大臣俊綱＝＝
尋花処不定

350 (1024) おしめともちりもとまらぬ花ゆへに春は山へをすみかにそする
波洗氷不定　俊綱

351 (1025) 吉野やまふゝくあらしに浪たかみみきはの氷むすひかぬらん

」二十八オ

」二十八ウ

352 (1026) 国房
風ふけは波うちとくるうすこほりすきにし春や水にやとれる

織女雲為衣　隆円法師
七夕やあまのはころもかさぬらんほし合の空のくもりぬるかな

353 (1027)
卯花作垣　俊頼
うのはなのかきねなりけり山かつのはつきにさし(ら)すけふとみつるは

354 (1028)
憶牛女言志　堀河右大臣
七夕は雲のころもをひきかさねかへさてぬるやこよひ成らむ

355 (1032)
花下言志　三宮
日かけはふふるきに花もさきにけりいさおいらくのかさしにもせん

356 (1033)
七夕詣事　資綱卿
かつらきの神もこよひの七夕とあくるをいつれなけきますらむ

357 (1036)
於伏見別案(業歟)詣(即歟)事　俊綱
わきもこかまつむつことのはしめにはひとり伏見の里とかたらむ

358 (1037)
月日匂
朝日かけにほへるこ(山)ゝにもる(て)月のあかさるいもを山こしにをきて

359 (1039)
月茜差月
はつせのやゆつきかしたには(我)ゝかくれたにあかね(さ)してれる(しる玉)月夜に人みけんかも

360 (1040)
暁夕月

」二十九オ

361 (1041) ゆふつくよあかつきかたの朝かせにわか身はちりぬ君を思ひかね

題不明

362 (1042) あまのはらふりさけみれはしらま弓はりてかけたるよみちはよけむ

月人

363 (1043) もみちする時になるらん月人のかつらのえたの色つくみれは

月夜宇津呂出布

364 (1044) ま(す)かゝみきよき月夜のうつらへはおもひはやます恋こそまされ

松葉月移

365 (1045) 松のはに月はうつりぬもみちはのすきぬや君にあはぬ夜おほく

夕月

366 (1046) あしひきの山をたよりにゆふつくよいつかと君をまつかくるしさ

月網指

367 (1047) 久かたの空ゆく月をあみにさしわかおほ君をかさしになれたり

月夜渡

368 (1048) こそみてし秋の月よはわたれともあひみしいもはいやとをさかる

萩越瑩

深養父

369 (1049) いくよへてのちにわすれむちりぬへきのへの秋はきみかく月夜を

身々移

善朝臣

370 (1050) 秋のよの。月のかけこそ。——この間よりおちはころもとみにうつりなめけれ

」二十九ウ

露底宿　藤景名

371 (1051) 白露のそこにひかりはうつれともとまらてそゆく秋のよのつき

牛如■(女牽牛)如渡

372 (1052) 天河霧たちわたるひこほしのかちをときこゆ夜のふけゆけは

織女渡　兼輔

373 (1053) たなはたのかへるあしたの天河ふねもかよはぬなみもたゝなむ

題不明

374 (1054) あふはかりうれしき事はなけれともわかれてのちそわひしかりける

雲々飛

375 (1055) 久かたのあまとふ雲にありてしるきみにあひみてたへ(うつ)るひなしに

八雲老(差)=　人丸

376 (1056) 八雲さすいつものこへ(ら)かくろかみはよしのゝかはのたきへなつそふ

雲伊左与布

377 (1057) ひとねろにいわか(はる)ものからあをねろをいさ(よ)ふ雲よなり(ママ)つまは(も)

風々色

378 (1059) ふくかせの色のちくさにみえつるは秋のこのはのちれはなりけり

秋木枯

379 (1060) 木からしの秋の初かせふきぬるをなとや雲井にかりのおとせぬ

雨々棚引

」三十オ

」三十ウ

380 (1061) 春かすみたなひく山の。桜花はやくみましをちりうせぬ間に

381 (1062) 雨露落 時まちて落るしくれの雨やみてあさかのぬまはうつろひぬらん

382 (1063) 秋時雨 兼賢覧卿 おしむらん人のこゝろをしらぬまに秋のしくれも身そふりにける

383 (1064) 霞秋霞 秋の田のほのうへきりあふあさかすみいつれのかたにわかこひやみん

384 (1065) 木霞渡凌 こかしきをまき〳〵もくやまに。春されはこの葉しのしのきてかすみたなひく

」三十一オ

385 (1066) 霞居 かすみゐるふしのたかねにわかへなはいつちこてかいもかけるも

386 (1067) 霞流 春かすみなかるゝともに青柳の枝くひもちて鶯そなく

387 (1068) 花色同霞 たちわたるかすみのみかは山たかみみゆる桜のいろもひとつを

388 (1069) 霧春 春山の霧にまかへる鶯とわれにまさりておもふらんやと

389 (1070) 夏霧 朝霧にやよ山こえて郭公うのはなねからなきてすくなり

390 (1071) 露春露　遍昭
あさまたき糸よりかけて白露を玉にもぬ(ける)春の青柳
=露寒
」三十一ウ

391 (1072)
秋のよは露こそことにさむからし草むらことに虫のわふらむ
=露置積

392 (1073)
秋の丶にいかなる露のおきつめはち丶のこのはの色かはるらむ
霜春霜

393 (1075)
春くれはみくさのうへに置霜のきえてもわれはこひわたるかな
秋霜

394 (1076)
秋山に霜ふりおほひこのはちるとしはゆくともわれすれめや
霜陰

395 (1077)
しもくもりせひとにかあらむひさかたのよわたる月のみえすとおもへは
雪々光

396 (1078)
大宮のうちにもともにひかるまてふれる白雪みれとあかぬもの
鶯妻
」三十二オ

397 (1080)
春なれはつまをもとむと鶯の梢をつたひなきつ丶もとる
=渡涙　二条后

398 (1081)
雪のうちに春はきにけり鶯のこほれるなみたいまやとくらむ
笠縫

399 (1082) 青柳をかたいとによりて鶯のぬふてふかさは梅のはなかさ

題不明　=敦忠素性

400 (1083) 木つたへはをのかはかせにちる花をたれにおほせてこゝら鳴らむ

雲居鳴

401 (1084) 鶯のくもゐにわひて鳴こゑを春のさから=そわれはきゝける

郭公声玉貫

402 (1085) 郭公なかはつ声はわれみれとさつきのたまにませてぬきてん

涕泣=従

403 (1086) 声はしてなみたはみえぬ時鳥わかころも(て)のひつをからなむ

厭郭公

」三十二ウ

404 (1087) 夏山になくほとゝきす心あらは物おもふわれに声なきかせそ

妻恋

405 (1088) 旅ねしてつまこひすれは時鳥神なひ山にさよふけて=け=り

題不明　侍従佐理

406 (1089) さみたれにふり。出てはなけとおもへともあすのためとやねをのこすらん

喚子鳥夜鳴

407 (1090) 人しれぬねさめの恋はよふこ鳥よふかきこゑをきくそ悲しき

雁々使

408 (1092) はるくさをむまくひやまにこえけ=くれはかりのつかひはやとりすくなり

409 (1093)
幾鳴
いもかあたりしけき雁かねこのゆふへきなかて過ぬともしきまてに
稲負鳥涙
」三十三オ

410 (1094)
山田もる秋のかりたにをく露はいなおほせ鳥のなみたなりけり
千鳥千世と鳴

411 (1095)
しほの山さしての磯に鳴(すむ)ちとり君かみちよ。(を)やちよとそなく
鶴 加介留歟 =駕 =雨

412 (1096)
もゝ(か)り船をきこきくらしいもか鳴(ママ)かたみの浦にたつかけるみゆ
松虫千世鳴　兼盛

413 (1097)
ちとせとそ草むらことにきこゆなるこや松むしの声には有らん
日久良志幾鳴

414 (1098)
ゆふかけにきなく日くらしこゝたゝ(えす)のひし(こ)とになけとあかぬこゑかな
蝦蟇妻呼

415 (1099)
かみつせによ(か)はつゝまより夕(ふ)くれはころもてさむしつまゝたむかも
鹿幾鳴

416 (1100)
わかをかにさをしかきなく初秋(萩イ)のはなつ(ま)と(も)(ひ)にきなくさをしか
馬鳴
」三十三ウ

417 (1101)
ころもてをあしけのこまのなく声も心あり(る)かもつねにけをなけ
梅雪開

418 (1102) あは雪にふられてさける梅の花きみかりやらはよそへてむかも

厭梅

419 (1103) やとちかく梅のはなうへしあちきなく待人のかとあやまたれけり

=に

柳青柳

420 (1104) あをやなき梅のはなとを折かさしのみての後はちりぬともよし

421 (1105) 桜照 ○ ノ柳機 ノ青柳の糸よりかけておるはたをいつれの宿のうくひすかきる（補入）

422 (1106) あし引の山へをてらす桜花この春雨にちりぬらむかも

題不明

423 (1107) ふく風にあつらへつくる物ならはこの一枝はよきよといはまし

山桜栽

424 (1108) いそのかみふるの山へのさくら花うへけんときをしる人そなき

躑躅浜生

425 (1109) 山こえてとをつのはまのいはつゝしわかくるまてはふしみてあ。しにく

=く =ら =

卯花匂

426 (1110) しろ妙に匂ふかきねのうのはなのうくもきてとふ人のなきかな

紅葉不匂

427 (1111) もみち葉は匂ひはしけしししかれともつれなく軒をたをりかさらん

=ま =しの木

」三十四オ

宇津呂布

428 (1112) もみちは、いまはうつろふわきもこかまたんといひしときの露けさ

題不明

429 (1113) なをさりに秋の山へを越ゆけはにしきをきぬもきぬ人そなき

款冬野山吹

430 (1114) いもに、る花とみしよりわかしめしのへの山ふきたれかなをりし

安知佐井八重開

431 (1117) あちさゐの八重さくことくやえをたもいまもわかせこみつ、しのかん

女郎宇津古布

432 (1118) たか秋にあらぬ物ゆへ女郎花なに色にいて、またきうつろふ

萩露散

433 (1119) この比の秋かせさむみはきの花ちらす白露をきにけらしも

槿夕散

434 (1120) あさかほは朝露をきてさくといへは夕かけにこそさきまさりけれ

紫苑題不明

435 (1122) 下くさの花をみつれはむらさきに秋さへふかくなりにける哉

菊々散　業平

436 (1123) うつしうへは秋なきときやさかさらん花こそちらめねさへかれめや

菅々根乱

「三十四ウ

「三十五オ

437 (1124) いなといへはしおむ(ママ)やはかせすかのねの思ひみたれてこひつゝもあらん

苔木葉生(槙)

438 (1125) あたへゆくおすての山のまきのはもひさしくみねは苔生にけり

花題不明

439 (1126) いとか(よイ)はのみなそこさへにてるまては(にイ)三笠の山もさき(はイ)にけるかな

花下紐　藤惟成

440 (1127) いつしかとゆきてや。みぬ(は)秋の丶の花のしたひもとけはてぬらむ

山筑波祢山

441 (1128) つくはねの山のふもとにすむ人はこのもかのもに秋をみるらむ

河伊曽

442 (1129) 〇

〇さ丶波にうきてなかる丶はつせ河よるへきいそのなきかわひしさ（補入）

443 (1130) きみかい〇へ〇の池のしらなみいそによせてしはしみ(ママ)ともあかぬきみかな

海輪多ノ底古久

444 (1131) わたのそこおきこく舟をへによせむ風もふかぬか波もたゝすく(て)

輪多津海手　―浪水底波

」三十五ウ

445 (1133) 〇みなそこ〇のおきつしらなみたつた山いつかこえけ(な)んいもかあたりみん

剱玉剱

446 (1132) わたつうみのてにまきもたる玉ゆへ(らイ)にいその浦はにあさりするかな

447 (1134) 玉たちをまきぬるいもかあらはこそ世のなかけくもうれしかるへき（補入）
簾玉垂無簾

448 (1137) 玉たれのあみめのまより吹かせのさむくはそへていれむおもひを
枕船路草枕

449 (1138) あをによしならの都に行人もかも草の枕旅ゆく舟のとまりつけ南
独寝手枕

450 (1139) ひとりぬるわかたまくらをひるはほしよるはくらしていくよへぬらん
紐々緒

451 (1140) 白妙のわかひもの緒のたえぬます（に）こひむすひたりあはむひまてに
鬘紫色

452 (1141) むらさきの色のかつらをはなかはにけふみむ人にのく（ママ）こひんかも
荒玉月

453 (1150) あら（き）玉（萩）のした葉もみちるあらたまの月のは（へイ）ゆけはかせは（早き）秋かせ（かも）
荒玉無事（年）

454 (1151) またあかぬ程にやかれしあらたまの恋しきかけを今夜こそみれ
袖返見夢

455 (1152) 白妙の袖うちかへしこふれはかいもかすかたの夢にしみゆる
鼻比立見人

456 (1153) まゆねかきはなひひもときまつらしかいつしかみんとこひくるわれを（ママ）

」三十六オ

遠地

457 (1154) このころはこひつゝもおらん玉くしけあけておちよりすへなかるへし

左々浪比良

458 (1155) さゝ浪やひらの山かせうみふけはつりす(る)あまの袖かへるみゆ

凡以江州称左々波(■証)哥尽加注不

」三十六ウ

(一行アキ)

伊曽ノ神奈良　太輔

459 (1156) いそのかみならのみやこのはしめよりなれにけりともみゆる比かな

敷妙無枕　藤高経

460 (1157) 夏のよはあふなのみしてしきたえのちりはらふまにあけそしにける

敷妙黒髪　田部寸(ママ)櫟子

461 (1158) をきていなはいもこひんかもしきたえのくろかみしきてこらんしつゝも(なかきこのよを)

用寄哥(音)　仁教俊中(僧都)

462 (1159) けふそくをおしまつきにてまさひませ花のさかりをこらんしつゝも

和哥用似哥(音訓)

亭子法皇幸於花山時遍昭詠之

463 (1160) まてといはゝいともかしこし花の山しはしといはむとりの音も願(ママ)(なか)

随便労詞哥　能因

」三十七オ

464 (1161) なしといへはおしむかもとやおもふらんしかやむまとそいふへかりける

465
(1162)
詠物名同名物哥。　源忠
秋くれと月のかつらのみやはなるひかりをたまとちらすはかりそ
(二行アキ)
題桂宮
(一行アキ)
犯傍題哥
三条太政大臣哥合題水上秋月イ秋岸辺
秋花　兼盛
466
(1163)
むらさきの雲とそみゆる月かけにみつの面てる岸の秋はき
和歌一字抄■　已上九百三十首　」三十七ウ
(三十八オ～四十ウ　遊紙)